

#### 4-1 事業者による成果報告

##### (1) 一般社団法人三陸まちづくり ART

###### ○和田被災者生活再建課長

それでは、ただいまから令和5年度被災者の参画による心の復興事業に係る事業者からの成果報告を実施いたします。

本日は5事業者からの報告を予定しております。3事業者分の報告が終了した後に、10分間の休憩を取らせていただきます。1事業者当たりの持ち時間は説明5分、質疑14分の計19分です。説明開始から4分が経過したところでベルを1回鳴らし、5分経過したところでベルを2回鳴らします。ベルが2回鳴った際は、説明の途中であっても終了してください。質疑の場合も同様に、終了1分前に1回、終了時に2回鳴らしますので、円滑な進行に御協力をお願いいたします。

それでは初めに、「一般社団法人三陸まちづくり ART」様による報告です。補助事業の取組成果について、説明をお願いいたします。

###### ○一般社団法人三陸まちづくり ART

一般社団法人三陸まちづくり ARTです。よろしくお願いいたします。

対象地域は大船渡市、陸前高田市、釜石市です。

目的・概要は、活力のスパーク、世代を超えた子どもたちのアート。子どもたちがアートを作り、様々な世代がそのサポートをするという仕組みにしています。子どもたちがメインですけれども、子どもたちが集まるところに、その親族の方やシルバーの方が集まるという場づくりをしています。

目的、テーマとしては、三陸沿岸を、陸前高田市から久慈市まで全部タイルで繋げるというアーティストさんの発想から、始まった事業です。これを外部から見に来ることによってさらに町が盛り上がり、今まで被災地を支援していただいた方々が、また被災者のお店を訪れるというような仕組み、テーマ、目的でやっております。

現在の小学6年生は、2011年には生まれていませんので、防潮堤に触れながら海側と町側を行ったり来たりして、海がここにあるということを知っていただきながら、防災意識を高めるということをしております。

昨日、防潮堤にタイルを張り終わり、現在は展示中で、今後SNSなどを活用して発表していきますが、慶長津波や3.11の津波の、大船渡市における平均浸水高（それぞれ10メートル、8.6メートル）が掲示してあります。

防災意識の新たな波というのは、防災教育とかではなく、自然に美術に触れながら、また自然に触れながら、子どもたちがその防災意識を高めるということですね。

世代を繋ぐ、これは被災者の方の、例えばお孫さんと津波の話はほぼしない、というような現状があります。その中で、こういった防潮堤アートを活用して、津波について話すということに繋げていくことや、1つの物を作るのに、各世代がみんな協力するということですね。元気の源が、子どもたちということは、すごく大事なことです。

スライドの写真だけ見ていただく形になりますけれども、保育園、学童保育、「みんなのしるし」1階のワークショップ施設で作業して、施設の皆さんが展示に協力してくれたり、最後にお配りしたイベント（のチラシ）は、3月10日に開催したもので、そのビ

デオをまだ編集中でございます。

このスライドを見ていただくとわかるように、災害公営住宅の高齢者が子どもをサポートするということがありました。この右下の方は74歳ですけども、毎日来て、子どもたちのために、いろんな作り物をしていただきました。

参加人数については、報告資料を御参照ください。

今後の展開を一言で言うと、三陸全体に広げていきたいと思っています。それと市町村も含めて、企業にサポートしてもらおうということ、今メインに動いております。

### ○和田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは、委員の皆様方から、御質問や御意見を頂戴できればと思います。よろしく願いいたします。

### ○委員

ありがとうございました。時間が短いということもあり、成果や結果についてあまりお伺いできなかったところでした。

本来の目的と先ほどおっしゃいましたけれど、「盛り上がる」ということが、具体的にどのような形でこの事業で現れたのか、要するに、自治体と支援者をつなぐためということと、それからその地域の方々が、この取組で、どのようになって欲しいのかということが、どのように成果として現れたのか、御説明いただければと思います。

### ○一般社団法人三陸まちづくり ART

先ほど写真で見ていただいたように、一人暮らしの高齢者が子どもたちの作品に触れる、あるいは子どもたちが公園で展示しているところに訪れていただき、その時に繋がりを感じられる、公園で出会いがあるということが大きいことです。

先ほども説明したように、家庭内で震災のことが話題になりにくい現実があり、学校の防災教育や団体がサポートしていければ良いなと思っていますところではあります。

もちろん子どもたちに、震災の教訓などを知ってもらいたいということもありますが、異世代間の交流を図ることで、地域の良さをもっと感じてもらいたいということもありますし、大船渡の美しい海が、凄く怖いものになることがある一方で、(大船渡市は)海から恵みをいただいて暮らしているという、凄く素晴らしい街なので、子どもたちが地域に愛情を持つことで地域に残る選択をしたり、将来市外に移転してもまた戻ってきて防潮堤のアートを見て、「これは昔お父さん、お母さんが作ったんだよ」と子どもに語れるような場を作っていきたいなと思います。子どもにとっては、見たことのない災害について知る機会でもありますけれども、人的・物的被害を受けた人たちにとっては、もう13年というのではなく、まだ13年という感じではあるので、街の中の子どもが凄く少なくなっている中で、街で凄く生き生きと楽しく活動しているのを見ていると、大人は凄く嬉しいという声をたくさん聞きます。そういう場を沢山作っていくということも、とても大事だなと思っています。

釜石市・陸前高田市・大船渡市で取組を実施したところ、3月10日に大船渡市で実施したイベントに、釜石市と陸前高田市から子どもの親族が参加してくれたというのは、

今回狙っていたことでした。

三陸ブルーラインプロジェクトのコンセプトとしては、タイルで繋げていくということですが、三陸全体で盛り上げていこうということで、被災者同士と一緒に話して盛り上がっていこうということで取り組んできましたが、3月10日のイベントで、既にかなり成果が出たと考えています。

#### ○委員

ありがとうございました。

今おっしゃっていたことについて、3地域の方が集まって盛り上がった、防災意識が高まったということなのか、それとも新たな繋がりができたということなのか。この取組は、アートを通じて防災意識を醸成していきましようということだと思うので、その辺をどう考えていらっしゃいますか。

それから、釜石市と陸前高田市は作業だけということだったので、これからの期待とすれば、釜石市と陸前高田市の防潮堤でも展示ができるような工夫があれば良いのかなと思いました。

#### ○一般社団法人三陸まちづくり ART

その通りだと思っており、釜石市と陸前高田市でも、展示をしていきたいと考えています。

#### ○委員

被災者と一般市民の区別がつかないという印象があります。取組として、「このような被災者の、このような心の負担を、少しでも軽くしよう」というような意図はあるのでしょうか。

#### ○一般社団法人三陸まちづくり ART

例えば大船渡市でも、少し内陸の方に住まわれている方の中には、津波の被害に直接遭っていなくても、会社が被害を受けたということがあります。私たちは、関係者はほぼ被災者として考えています。

このプロジェクトのスタートとして、野々田や茶屋前の方々が、防潮堤の近くを散歩された時に、このグレーの重い空間が、何とか華やかにならないだろうかという相談を受けたことがあります。そこで、皆さんが様々なアイデアを持ちよって、その中からタイルアートが選ばれました。毎日のように御夫婦でとか、あるいは犬と散歩をして、そしてサン・アドレス公園から子どもたちの声が聞こえるというのは、凄く大きいことだと思っています。

#### ○委員

ありがとうございます。

## ○委員

事業参加人数の「その他」には、どのような方が含まれているのでしょうか。

## ○一般社団法人三陸まちづくり ART

先ほど申し上げたように、私たちは、地域の方々は全員被災者だという認識で接しております。そのため、「その他」については、ブルーラインプロジェクトを支援してくださっている市外・県外の方たちを含めています。

例えば、フェイスブックの三陸ブルーラインプロジェクトのグループには800人が参加しています。そういったSNSなど様々な形で繋がりを持って、プロジェクトを応援してくださる方がたくさんいます。このタイルも岐阜県多治見市の企業さんが協賛してくださっているものです。こういった方々を含めると、大体これくらいの人数になります。

このタイルを寄付できるようなふるさと納税を申請しているところです。

2016年ぐらいまでは、地域の商店街や町内会に、かなり多くの外部の方が来ており、一人暮らしの高齢者も凄く盛り上がっていました。そのきっかけ作りとして、これは凄く重要だと思います。

高齢者でも、フェイスブックだけやっている方は、多いです。被災地では、ヤフーさんが支援に入った結果、皆さんiPadを持っています。コロナ禍の影響は大きいですが、この取組とSNSの活用によって、その繋がりをもう一度取り戻そうという意識も持っています。

## ○和田被災者生活再建課長

それでは、所定の時間となりましたので、以上で「一般社団法人三陸まちづくり ART」様の報告を終了します。ありがとうございました。

## ○一般社団法人三陸まちづくり ART

後ろに、子ども達が集会所などで作った作品がありますので、休憩時間などに見ただけだと、どういったものか分かりやすいと思います。

## (2) 公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

### ○和田被災者生活再建課長

それでは次に、「公益財団法人音楽の力による復興センター・東北」様による報告となります。補助事業の取組成果について、説明をお願いいたします。

### ○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

公益財団法人音楽の力による復興センター・東北でございます。

今年度実施いたしました、音楽と交流によるコミュニティ形成支援事業の取組状況や成果等について御報告いたします。

まず、取組全体の目的、概要ですが、この事業は、地域コミュニティの形成促進、心身のケアや生きがいがづくり、住民同士の交流機会の創出等を目的に、プロの演奏家によ

る復興コンサートを開催し、その実施に至る過程にも被災者の方々に参加していただくというものです。

次に、取組効果、特徴ですが、主な効果としては、復興コンサートへの参加を通じて、仲間意識が醸成され、それが円滑なコミュニティ形成にも良い影響を及ぼし、さらに心身の健康づくりにも繋がるものと考えております。

続きまして、具体的な取組内容ですが、被災地域や被災者が多く移り住んだ地域において、幅広い選曲での演奏に加え、イントロクイズ、呼吸法や輪唱などを取り入れた参加型のコンサートを開催いたしました。

また、3会場で地元の合唱サークルとの共演を行ったところ、サークルメンバーはもとより、他の参加者にも大変好評で、集客数の増加に繋がったところです。

次に実績ですが、今年度は釜石市、大槌町のほか、新たに盛岡市内の2会場を加えた13会場で、計25回実施しました。コロナの影響で中止せざるを得なかった会場もありましたが、目標である520名を上回る583名の参加があったところです。

取組内容の具体的な効果に関しては、アンケートの自由記述を御紹介申し上げながら、御報告させていただきたいと思っております。

まず、「自主活動サークルの皆さんが、広く声掛けをして来場者を集めてくれました」というものや、また、「ここまで徒歩で来られただけでも、また来たいと思いました」という記述があり、お互いの声掛けにより、外に出かけるきっかけになったものと思われれます。

また、「前向きになれて楽しかった、大声を出してスーッとしたり」「気持ちが前向きになり、生活にハリが出ます」といった記述から、本事業への参加を通じて、ストレスの軽減等に繋がったものと思っております。

さらに、「皆と一緒に歌えたこと、楽しく心が癒されました」「一体感が大変よかったです」という記述から、一緒に歌うことで協調性や仲間意識を育むことができたものと思っております。

そして、「歌って顔が明るくなっている」「背筋が伸び、発声練習ができてよかった」ということで、参加型コンサートとしたことにより、健康づくりにも繋がったと考えています。

次に目的の達成状況でございます。本事業については、猛暑による外出控えや、感染症の影響等もありましたが、初期の目的は概ね達成することができたものと考えています。

特に①に関しましては、地域の学校等への声かけや地域団体内での本事業の紹介により、広報活動がより広がったこと。また、地元の合唱サークルとの共演や、サークル活動の紹介を行ったことで、新しい団員が増えたところもあり、より自主的な活動に繋がる兆しが見えたところです。

また、特別事業独自の評価項目の⑤に関しては、会場を災害公営住宅内や、隣接の施設としたほか、災害公営住宅へのチラシの全戸配布やポスター掲示等を行ったところです。

同じく、特別事業独自の評価項目である⑥に関しては、一人暮らし世帯へのお弁当の配食事業や、生活支援相談員の個別訪問の際に、チラシの配布も併せてお願いするなど、

できる限りきめ細かな声掛けを心がけたところです。

事業の参加人数ですが、全体の参加人数は先ほど御紹介したように 583 名、このうち災害公営住宅等に居住する方の参加は 295 名であり、全体の 50.6%となっています。

最後に、今後の事業の見通しについてですが、地元の音楽家や各種団体等に事業の企画運営を引き継げるよう、可能性をリサーチし、必要なノウハウを伝えていきたいと考えています。

また、人口減少とともに縮小していく地域活動について、隣り合う地域間の交流・連携を促すきっかけとなるような合同開催を、次年度以降検討していきたいと考えています。

以上簡単ですが、音楽と交流によるコミュニティ形成支援事業の成果報告とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

### ○和田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは、委員の皆様方から御質問、御意見を頂戴したいと思います。

### ○委長

まず、コロナに阻まれながら、ここに来て地元のサークルとの共演によって、様々な方が皆さんと、受動的だけではなく一緒に実施できたという印象を持ちました。

この事業を長く審査していて、長年の課題が大いに前に進んだと思います。これは、コロナの影響で、実施したいことができないというジレンマがあったのだと思いますが、ここに来て、このようなことができたというのは、審査委員としても非常に良かったと思いつつ、報告を聞いていました。

今後の事業の中で、今年度の成果をどのように引き継いでいくかという課題があると思います。また、皆さんは長年この事業を実施してきたので、行政や、地域で文化活動に取り組んでいる方々と、更に協力・連携を深めていく上で、どういった課題があるのか。皆さん側の課題でも、相手側の課題でも構わないので、参考までに教えてください。

### ○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

ありがとうございます。大槌町では、コロナ禍の最中から、屋外で、コーラス大槌さんと1～2曲一緒に歌うということがあったのですが、そういった交流が、ようやく各地域に広がってきました。

合唱団体とその指導者の高齢化が進んでいて、長く活動を続けていきたいとしても、そのためのまとめ役も難しくなっているということが、1つの課題となっています。

今年度は、童謡大槌さんと共演をしました。もともと、大槌童謡歌う会は、まとめ役の方が転居するというので、解散の方針でした。そこで、同会を指導されていた方が引き取り、その上で、形を変えて更に参加しやすくという考えから、童謡大槌という名前で、再スタートしたという出来事がこの1～2年があったところで、共演させていただくことができました。

後は、特に大槌町の災害公営住宅に訪問した時に、町内会の運営自体がなかなか難し

いということで、社会福祉協議会や民生委員さんなどは、町内会を再び活性化させることに非常に苦勞していました。こういった状況で、まずは集会所を、もう一度皆が集まる場所にするためのきっかけづくりとして、「また来て欲しい」と言っていたいただきました。年に1～2回訪問するだけではあるのですが、他の団体が、コロナによって全く活動できなくなったということもあり、「ぜひまた考えて欲しい」というお話をいただいております。

釜石市も、災害公営住宅と公民館（地区生活応援センター）が一体化している中で、この10年間で、高齢化や施設に入所される方が出てきたことで、参加者が徐々に少なくなっています。次の世代が参加するきっかけがまだないということで、参加者が減っているということは、応援センターの所長さん達も心配していました。この課題にどう対応していくかという話をしながら、2月は帰ってきたところであり、初めての方も是非来てくださいというようなアプローチが必要なのかなと考えています。

### ○委員

参加者アンケートについて、全体の実数として583名の方が参加したということからすると、回収率は結構なものだと思います。

継続事業ということで、以前、参加者の大部分が高齢者で、なかなか改善ができないとおっしゃっていたかと思いますが、今年度は、30～60代の各年代の方々が増えていて、頑張られたのだなと感じました。こういった方々は、具体的にどのような属性なのか、教えてください。

### ○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

合唱団体に参加している方や、特定の演奏者のファンなどです。この取組を継続してきた中で、「この人の演奏をまた聞きたい」というファンのような方が出てくるようになりました。こういった方の中には、2会場に来てくれる方や、少し年齢層の低い方がいらっしゃいます。

後は、地域の音楽家の方たちと、出来るだけ話をしたいと思っています。まだ2～3名ではありますが、ピアノ指導者や合唱団で伴奏をしている30～40代の方たちが、コンサートに来てくださったことがあります。

50～60代よりも下の世代の公民館利用が進まないと先ほど説明したのですが、コロナ禍後は、以前はいらっしゃっていなかった方が、コンサートに来てくださるということもあります。

### ○委員

ありがとうございます。そうすると、出演者側に関わった人たちが興味を持ち、参加者の皆さんとの交流も図れたというような理解でよろしいですね。

### ○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

そのとおりです。

## ○委員

ありがとうございます。

アンケートに関する疑問点なのですが、回答者の住居について、総数 453 のうち、「災害公営住宅」は 115 で 25%にとどまっています。一方、「被災し、再建・移転した自宅・アパート等」「震災前から住んでいる自宅・アパート等」は合計で 70%弱となっています。先ほど、参加者数としては、災害公営住宅居住者が約半分ということだったのですが、住居についての回答からすると、違和感があります。取り扱いの問題ですか。

## ○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

項目によってお答えいただけなかった方や、そもそもアンケートに回答しなかった方もいらっしゃいました。この場合、回答済みのアンケートから、項目ごとの割合を算出し、回答されていない方のアンケートに反映しています。

気になったこととして、こちらが事情を把握している方の中には、津波の浸水被害を受け、自宅を改修して居住している方が、本来は「被災し、再建・移転した自宅・アパート等」に該当するにも関わらず、「震災前から住んでいる自宅・アパート等」を選択してしまうということが、地域によっては、結構ありました。

## ○委員

この数字の中に、被災した方とそうでない方が混在しているという理解でいいですか。

## ○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

はい。

## ○和田被災者生活再建課長

それでは、所定の時間となりましたので、以上で「公益財団法人音楽の力による復興センター・東北」様の報告を終了します。ありがとうございました。

## (3) 釜石まちづくり株式会社

### ○和田被災者生活再建課長

それでは、次に「釜石まちづくり株式会社」様による報告となります。補助事業の取組成果について、説明をお願いいたします。

### ○釜石まちづくり株式会社

よろしく願いいたします。釜石まちづくり株式会社でございます。

落語と e-sports による心の復興事業について、概要からお話させていただきます。災害公営住宅等で、三遊亭楽大さんをお招きした落語会とこれに続いて e-sports 交流会を実施しました。認知症にも効果がある e-sports を実施することで、普段引きこもりがちな被災者の方々の外出のきっかけ作りや、コミュニケーションの場の創出ということを目的としました。

効果としては、災害公営住宅の入居者や近隣住民同士の交流が図られたことや、開催



ノウハウを各公民館に伝えることで、次年度以降の企画実施に繋げることを目指しました。

特徴としては、先ほど申し上げたような、認知症予防として注目されている e-sports があります。

具体的な取組内容について、全 12 回実施し、参加者数は合計で 263 名でした。このうち、スライドで朱書きしている 2 回は、放課後子ども教室などとの共催として、地域の子ども達と一緒に実施しました。

アンケートの結果として、参加者の過半数が、「震災の影響のあった」「60 代以上の」「女性」でした。また他の属性については、「無職または主婦」の「ひとり暮らし」「核家族」が多かったところです。「災害公営住宅の住民」「被災し、再建・移転した」の合計割合が 62%であり、心の復興事業が対象とする属性と近い方々に、多く参加いただいたと思っています。

回答者の事業への関わり方としては、「企画、計画」ではお茶っこ会の開催を提案いただき、実現した地域もありました。「企画、計画」「事前準備」の段階には、20%ほどの方が参加しました。

事業効果としては概ね良好だったと考えています。特に「参加者同士の交流」と「前向きな活動」については、マイナスの意見がほぼ無かったので、今後も継続的に実施していきたいと考えています。

参加者の声としては、「楽しく過ごすことは体の健康にも繋がると思います」というような、前向きな意見をたくさん頂戴しました。

目的の達成状況に関して、①については、釜石市まちづくり課や公民館、大槌町協働地域づくり推進課などの各機関との連携とともに、参加者が近隣住民に声掛けをして参加を促すなどにより、主体性の部分は達成できたと考えています。

②のつながりや生きがいについても、久しぶりに災害公営住宅の方々が集まり、人と人との繋がり大切さを、再確認できる場になったと考えています。

③の心身のケア等についても、人との繋がりとともに、e-sports が凄く盛り上がり、子ども達と一緒に楽しんだ方が多かったところなので、今後も集会所に来ていただけるように、交流の場の創出に努めていきたいと考えています。

④の多くの被災者及び地域住民等の参加及び交流が図られる仕組みが設けられているかについては、アンケートから、災害公営住宅入居者及び自己再建した住民が多く参加したということと、子ども達との連携ということで、世代間交流にも繋がったと考えています。

⑤の自立的な事業展開については、高齢化が進んでいる中での自立的な活動には難しさがありますが、放課後子ども教室といった、これまで継続されてきた事業とのコラボレーションにより、一緒に継続していくという形が見えてきたところであり、前向きに考えています。

⑥については、お茶っこ会の企画に前向きな地域の方がたくさんいました。三遊亭楽大さんをお招きしたことから、おもてなしをしたいという気持ちがあり、そしてお茶っこ会の企画という前向きなことに繋がったということが、今回はっきりしました。

審査委員会からの助言について、地域で独自に発展した住民交流の場について調査し

たところ、2事例ありました。1つ目は、屋敷前アパート集会所が、コロナ禍以降一度も集まっていなかったところ、この事業がきっかけとなって、再度集まりの機会を設けることを企画しているということです。2つ目は、この取組が、浪板ベンチャーズ（大槌町浪板地区の音楽団体）の活動再開のきっかけ作りに繋がったということがありました。

参加者の実人数については、263名です。特に孤立している方については、アンケートを参考に、ひとり暮らしの方49名となりました。

今後の事業の見通しについて、今年度の取組が大変好評だったため、災害公営住宅の自治会、公民館、社会福祉協議会などと引き続き連携し、開催に繋がるよう協力していきたいと考えています。

また、放課後子ども教室がe-sportsを取り入れたいという意向を持っているので、これまで培ったノウハウを伝授しながら、地域を巻き込んだ事業となるよう、弊社としても協力していきたいと考えています。

報告は以上となります。

#### ○和田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは、審査委員の皆様から、御意見御質問をお願いいたします。

#### ○委員

e-sportsとは、具体的にどのようなものだったのでしょうか。

#### ○釜石まちづくり株式会社

「太鼓の達人」を高齢者と一緒に遊んだり、間違い探しといった脳トレを行ったりしました。

#### ○委員

先ほど認知症や心身の健康に言及していたので、手先を使うものという風に言った方が、内容に繋がりが生まれると思います。

具体的な効果に関するアンケート結果で、全ての項目で「変化なし」という回答が一定程度あるのが気になりました。改善された、良かった、どちらかと言えばよかったという肯定的な回答が大部分を占めている一方で、「変化なし」も一定割合あるという結果だったことについて、どういった分析をしているのか教えてください。

また、この取組は、落語を聞くということと、e-sportsに自分で参加するということの、2つの部分から構成されていますが、アンケートは一括で行われています。仮に別々にアンケートを行った場合に、どのような結果となるかについて、検討したことがあれば教えてください。

#### ○釜石まちづくり株式会社

「変化なし」という回答が多かった点については、高齢の方が多く、どの選択肢を選

んだらよいか悩んだ結果、「変化なし」としたということがあるかと思います。

特に主体的な参加ということに関しては、おそらく参加者自身が、落語を聞くことによって、主体的な心身のケアに繋がったと考えたのかと思っています。

先ほど申し上げたように、落語家がいらっしやったということで、参加者に「この場を盛り上げたい」「おもてなしをしたい」という考えが芽生えた様子が、随所に見られました。前向きな活動などについては、参加者本人が思っている以上に成果が出ていると考えています。

#### ○委員

ありがとうございます。おそらく「交流」や「外出」については、楽大さんの落語会で一定の成果を収められると思います。ただ、今回の特色である e-sports に対する評価があまり高くなかった点については、改善の余地があると思いますので、今後検討いただければと思います。

#### ○委員

今年度は、放課後子ども教室や小学校との共催によって、参加人数が大きく増加したということでしたが、高齢者と子どもと一緒に参加することによる課題や難しさを教えてください。また、今年度の取組を踏まえて、今後、高齢者と子どもが同様に参加する際の工夫などがあれば教えてください。

#### ○釜石まちづくり株式会社

高齢者と子どもが同時に参加する上での難しさとしては、子ども達と高齢者の温度差のようなものがあります。イベントでは、子ども達が凄く元気で、e-sports などに率先して参加するのですが、高齢者は、子ども達の様子を少し後ろから引いた形で見てしまうという場面が、結構ありました。

一方、自分たちで昼食会を開催した地域では、高齢者が主体的に料理を準備して振る舞っていました。やはり高齢者が輝く場所と、子ども達が楽しめる場所をしっかりと整える、高齢者も子ども達も主体的に参加できるように、タイムスケジュールのようなものをもう少し設計する必要があるということが、反省点です。

#### ○委員

子ども達と一緒にイベントをやると、子ども達が凄く積極的に参加する一方で、高齢者が少し引き気味になってしまうということでした。

どのような場所でも、参加者が、世代に応じて活躍できる場面を設定するということが、例えば、「震災の影響があった」「60代以上」の「女性」が多く参加したとのことだったので、子ども達は孫世代になるのだと思います。そういった参加者が、子ども達に何かを御馳走してあげるというような役割を、取組の中で細かく設定する必要があるということが、教訓となるのかもしれないと思いました。

## ○委員

吉里吉里公民館での取組を視察させていただきました。ありがとうございました。楽大さんの魅力に参加者が引っ張れているようで、凄い人だと感心しながら見ていました。

一方、今後、e-sportsを中心に、自立的に事業を展開していくにあたって、楽大さん程ではないにしても、皆さんを引っ張っていけるような、地域の中心人物には目星をつけているのでしょうか。

## ○釜石まちづくり株式会社

今のところ、特段目星はついていませんが、先ほど別の委員からコメントがあったように、子ども達と高齢者が、それぞれ主役となれるような場を今後設計する必要があると、今回の取組を経て改めて感じたところでした。

また、自立的な開催に向けては、他機関との連携が非常に重要だということを再認識しました。子ども達の教育に関係する機関なども巻き込んでいくとなると、エンターテインメント性との両立が難しくなる可能性があります。今回の取組を通じて、子ども達をメインターゲットとすることが、1つの方法として見いだせたと感じています。

## ○委員

次年度以降の展開について、教えてください。

この取組を、釜石まちづくり株式会社が、自立的に、釜石市を対象に実施していく場合、大槌町での展開にも関わっていく予定なのでしょうか。それとも、大槌町におけるパートナーを探しているのでしょうか。

## ○釜石まちづくり株式会社

今回、大槌町では、特に、町の協働地域づくり推進課や社会福祉協議会の方が、積極的に参加してくださいました。こういった方々に対する地域の信頼は非常に厚いので、次年度以降の大槌町での取組におけるパートナーとして考えています。

## ○和田被災者生活再建課長

それでは時間となりましたので、以上で「釜石まちづくり株式会社」様の報告を終了します。ありがとうございました。

ここで10分間の休憩を取ります。15時35分から報告を再開いたしますので、審査委員の皆様、それからお越しいただいた皆様におかれましては、時間までにお戻りくださいますようお願いいたします。

## 4-2 事業者による成果報告

### (4) みやこ映画生活協同組合

## ○和田被災者生活再建課長

それでは時間となりましたので、事業者からの報告を再開いたします。「みやこ映画生活協同組合」様から、補助事業の取組成果について説明いただきます。

## 〇みやこ映画生活協同組合

「みんなでつくる交流映画会及び上映者育成事業」で今年度活動させていただきました。概要は割愛させていただきます。

今年度は、久慈市・釜石市・宮古市・大船渡市・陸前高田市・山田町・大槌町・野田村の8地域の公民館やコミュニティセンター等で、上映会と交流の時間を設けることができました。

同会場で2回の上映ということで計32回、計画だと30回でしたが、会場を1つ増やしたことで、16施設32回となっています。

上映会はこの写真のように、前後にお茶会を設け、住民の皆さんと一緒にお茶を飲んだりしながら交流をして、映画を上映して楽しんでいただきました。

夏の上映会では、「タイマグラバあちゃん」の監督に来ていただいて、上映後にコメントをいただく機会もありました。

参加者の参画ということで、昨年度は自治体、自治会、社協さんとかなり密に連携できましたが、今年度も自治会の方々と上手く連携し、一緒に上映会を開催することができました。

事前の打ち合わせから、当日の準備・撤収など、危ないところ以外は可能な限りお手伝いいただきました。

取組②の上映者育成及び企画上映会は、計画通り、2ヶ所でワークショップと、受講生が企画した上映会を行うことができました。

こちら（プレゼンテーション資料）の上の写真は、洋野町で開催したワークショップです。多くの方に参加いただきました。

上映方法を学んだ後、自分たちで上映したい作品を選び、参加者で実際に上映会を開催することができました。上映会の時も、監督のトークは予定になかったのですが、たまたまテレビ岩手の取材で来ていたディレクターが、その映画の監督だったので、コメントをいただくことができました。

こちらも、テレビ岩手のニュースプラスワンで、2日間、2回にわたって紹介いただきました。ありがとうございます。

次のスライドは、宮古市でのワークショップですが、上映会は岩泉町で行いました。受講生から、宮古市は映画文化に触れる事がすごく多いので、岩泉町で上映したらどうかという意見が出て、他の受講生も、それがいいのではないかということで、急遽、実施会場が岩泉町となりました。

せっかく岩泉町で実施するのだから、高校生にチラシとポスターのデザインをしてもらおうということで、岩泉高校の生徒さんが、ポスターとチラシをデザインしてくれました。

送られてきた中から選ぶのは心苦しかったのですが、素晴らしい作品を作ってくれて、無事に上映会を行うことができました。

今回、たくさんの方にアンケートに答えていただきました。中でも、「元気で前向きになった」とか、「この場に来てよかった」とか、「映画を震災後に見るのは初めてだった」という声もありましたが、結構多かったのは、「古い知人と会えた」とか、「参加して顔見知りができた」とか、そういった意見が今年は特に多かったので、上映会を開催

して非常によかったなと思ったところです。

有料でも見たいので料金を払っても構いませんという意見もありましたので、これは今後の課題とさせてもらいたいと思いますが、やはり心が豊かになったとか、前向きになったとか、心の栄養をいただいたとか、非常に嬉しい御意見がたくさんありました。

アンケートの回収数は 615 で、震災の影響ありが約 9 割 (85%)、災害公営住宅等に入居している方が 52%ということになっています。

参加者同士の交流、前向きな活動、心身の健康、自立的な活動の意欲などは、いずれも概ね 90%以上の回答で、良い結果だったと思います。

参加者の人数も、計画だと延べ 610 人でしたが、実績では 676 人ということで、計画比 110%となりました。

また、先ほど言ったとおり、有料でも構わないという話がありましたが、今後の活動も含めて、地域の自治会でも、今年度 2 回目の上演の際に、次年度以降 (予算が) 無いものと考えたら、どうやっていきますかというか、いろんなサポートをうちの方で行いますので自分たちでもやりたいなっていう声も出てきているので、そういった場所をこちらができるだけサポートして、自立的な活動につなげていければいいなと思っていました。

ワークショップに関しては、昨年受講した方々が、独自に上映会を実施している動きが陸前高田市と野田村でありましたので、今年度受講した皆さんで、今後自分たちで上映会を作っていくという方をサポートして、協力していきたいと思っています。

### ○和田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは、委員の皆様から御意見御質問をお願いいたします。

### ○委員

みやこ映画生協さんは、様々な形で長い間、この枠組みの事業を継続しているということで伺いたいのですが、時間が経つにつれて、上映作品に違いが出てくるのでしょうか。震災当初は、元気がもらえる内容や、勇気が湧いてくるものが多かったかと思うのですが、そろそろ何らかの目的を持って選定しているのでしょうか。

2 つ目は、例えば地域の皆さんが自主的に上映会を開催するとなると、やはり一番のネックになるのは、著作権の関係も含めて上映に制限があるということだと思います。このことについて、金銭的な部分も含めて、みやこ映画生協さんで考えていることはあるのでしょうか。

### ○みやこ映画生活協同組合

作品については、まさに気づいていただいてありがとうございます。初期とは作品が大きく変わっていて、例えば寅さんを上映する機会は無くなってきています。逆に「タイマグラばあちゃん」のような、自分たちの生き方を考えるようなドキュメンタリーが多くなっています。アンケートに記載されている要望には出来るだけ応えたいと思っていますし、自治会長さんなどと相談して作品を決めることもあります。いずれにしろ、

現在は、初期の頃とは全く異なった作品が上映されています。

やはり地域で映画を見て、単に「楽しかった」ということだけではなく、少しつらい映画でも、何か考え・思いを持ってもらいたい作品を多くチョイスして、上映しているところではあります。

あとは、「いつでも夢を」などは（アンケートに）入っているのですが、それを地域で上映するにあたっての、著作権や映画料といった金銭的なサポートは、私どもの団体では少し難しいところがありますが、機材の借り方・使い方のレクチャー、上映場所（の提案）、地域での補助申請など、私どもに手伝えることがたくさんあると思います。

また、支部についてですが、私1人でずっと取り組んできたので、各地域にそういった方がいて、それぞれが実施できる状況を目指して、この上映者育成の取組を継続してきました。今年は、昨年度、陸前高田市で開催したワークショップの受講生が、同市で3回ほど地域上映会を実施しました。こちらは、サポートが必要ないほどに自分たちで実施しているので、徐々に効果が出てきているのかなという状況ではありますが、これからも頑張っていきたいなと思っています。

## ○委員

洋野町のワークショップに参加させていただいたときに出了た作品が上映されたということで、とてもよかったなあとと思って聞かせていただきました。

それで、最初に報告した三陸まちづくりARTのタイル作成は、保育園児から参加をもらう。次の釜石まちづくり株式会社は、どちらかという小学生ぐらいのeスポーツでしたが、今度は、高校生の話が出てきました。高校生がこういう形でポスターを作ったり、高校生となると、まさしく上映会活動みたいなことをやろうと思えばできる。

ただ、おそらく、今の高校生は、大きな画面で映画を見る機会がほとんどないと思います。また、震災のときに小学生だったか、あるいはもう少し下の世代だったのだとも思います。今回、高校生が上映に関わったので、高齢者も高校生などの若い世代も、こういった上映会に参加しながら次のステージに向かっていくという、新たなフェーズに入りつつあるのではないかと思いつつ、新鮮な気持ちで報告を聞いていました。

## ○みやこ映画生活協同組合

ありがとうございます。この高校生の参画は、私の戦術でも戦略でもなくて、受講生から意見が出たということがよかったと思います。受講生から、せっかくポスターとチラシを作るのなら、高校生に作ってもらわないかと。

そして、その受講生が学校と掛け合い、受講生自身が、授業の1コマをワークショップとして講義を行い、その後生徒が一人一人デザインを考えてくれました。これは、私が意図していないところで上手く広がっていったものです。当日は高校生が数名しか来てくれなかったのですが、本当はもっと来てほしかったのですが、それでも、今の高校生が2時間じっくりと、「グリーンブック」という、アカデミー賞を取った素晴らしい作品を見たということは、非常に大きなものだと思います。

## ○和田被災者生活再建課長

それでは時間となりましたので、以上で「みやこ映画生活協同組合」様からの報告を終了します。ありがとうございました。

## (5) 特定非営利活動法人いわて連携復興センター

### ○和田被災者生活再建課長

それでは、次に「特定非営利活動法人いわて連携復興センター」様による報告となります。補助事業の取組成果について、説明をお願いいたします。

### ○特定非営利活動法人いわて連携復興センター

「被災者の主体性醸成による地域コミュニティ支援」の成果について、報告いたします。

まず、全体を簡単に説明しますと、取組が大きく2つあります。1つ目は、災害公営住宅における自治組織の運営支援及び入居者による自主行事等の開催支援で、2つ目は、地域行事開催支援による被災地区の活性化と風化防止です。

特徴・効果としては、一過性のイベントではなく通年の伴走支援に取り組んでいます。災害公営住宅の住民や地域の被災者を対象に、話し合いと合意形成の実践を繰り返し、住民の主体性醸成そして人づくりに繋げていくものとなっています。

取組内容ですが、まず取組①は、陸前高田市2団地（市営住宅今泉団地、同下和野団地）と、盛岡市1団地（県営南青山アパート）の、合計3団地の災害公営住宅を対象としています。また、取組①の中にも、「ア 災害公営住宅における自治組織運営支援」と「イ 災害公営住宅入居者による自主行事等の開催支援」があります。

陸前高田市の市営住宅今泉団地では、アとイの両方を実施しました。アについては、今年度、今泉団地自治会がベースではあるのですが、女性部が立ち上がりましたので、女性部も含めた伴走支援を行いました。イについては、消防訓練の実施をツールとして、担い手育成やコミュニティ活動の実践を重ねました。訓練当日の運営を担う係を設けて、住民の主体的な参加を促したところ、10月29日の本番では20名が係を担当し、58世帯中36世帯42名が参加しました。また、当日の避難場所には来られなかったのですが、廊下まで避難した方が1名いました。

同下和野団地は2棟120戸が整備されていますが、同様にアとイの両方を実施しました。下和野団地役員会をベースに話し合いなどに対する伴走支援を行い、10月1日に消防訓練を実施しました。今泉団地と同じように係を設けたところ、当日は41名が担当し、117世帯中86世帯95名が参加しました。また、11名が廊下避難を行いました。

盛岡市の県営南青山アパートでは、イとして、消防訓練の実施を主に支援しました。訓練当日は、24名が係を担い、94世帯中55世帯71名が参加し、廊下避難は3名でした。

取組②は、大船渡市三陸町越喜来地区における地域行事の開催支援を通じた活性化と風化防止です。行事としては大きく2つあり、8月の三陸港まつりと、3月の震災周年行事です。災害公営住宅の入居者や地域住民などが参加しており、先週末の震災周年行事も合わせると、災害公営住宅68名、地域住民32名が参加しました。



具体的な効果についてですが、現在事業継続中のため、今後、自治会といった組織の中心メンバーを対象にアンケートを行う予定であり、本日時点では、スライド記載の文章で説明させていただきます。なお、災害公営住宅では、参加者アンケートとは別に、小学校5年生以上の住民一人一人を対象に、各団地で、消防訓練に関するアンケートを実施しています。

3つの災害公営住宅では、消防訓練継続の意思が固まっている部分と、訓練から派生した団地ごとの話し合いのテーマや、取り組むべきことがあるので、支援を継続しているところ です。

①については、こういった話し合いが、住民同士のコミュニケーションや繋がりづくりになっています。また、越喜来地区では、地域行事に、小学生・高校生・大学生といった次世代が参加することで、地域の人材が育成されています。そして、次世代の活動が、高齢化している現役の担い手に刺激を与え、双方の心の復興に繋がっています。

②については、こういった形で、自治組織や実行委員会が主体的に活動しているところですが、定期的な話し合いの場以外でも働きかけたということと、消防訓練に関するアンケートに回答した方の40%以上が、「消防訓練やその準備が、普段顔を合わせない他の住民を知る機会になった」と回答していることから、団地での安心・安全な生活が、前向きな生活に繋がるものと考えています。

③については、同じように消防訓練に関するアンケートにおける自由記載欄で、「訓練を通じて団地内の人と知り合うことができ嬉しい」という声があることから、住民の喜びにも繋がっていると感じています。

④と⑤については、話し合いプロセスの中で「自分たちごと」として取り組むことで、住民同士の交流が図られたと思っています。

特に⑥の孤立リスクがある被災者の参画ですが、先ほど廊下避難者について説明しました。この理由としては身体的なものが多く、同様の理由でこもりがちになる方もいらっしゃると思います。こういった方が参加できたこと、またこのプロセスを回覧ではなく全戸配布で周知したことで参加に至った方もいたということ、運営側は実感できていたと思います。

どちらの取組も、主体的な参画を見据えて活動してきましたので、一年間を通じて、企画から一緒に取り組めたと感じています。

スライドに記載している参加者数は、2月末までの数字であり、最終的には3月までの累計も含めて報告をさせていただきます。

今後の事業見通しとしては、一定のノウハウ作りや心の復興という軸は一貫しているのですが、やはり実践の積み重ねが必要ですので、現場からは、長期的な支援が求められています。

我々も同様に長期的な支援が必要と感じていますが、住民の自立性・自主性を、今後、さらに促していくということを見据えた上での継続が望ましいと考えています。具体的には、今後、現場のニーズをしっかりと踏まえて検討していきたいと思っています。

#### ○和田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは委員の皆様、御意見御質問をお願いいたします。

## ○委員

内容について伺います。特別事業であることに加えて、事業計画書の波及効果では、13～18万人という、かなり大きな数字が記載されています。取組①の災害公営住宅の自治会支援について、災害公営住宅を広範囲で考えると、既に機能していない、あるいは自治会を作らなくて良いというところもあると思います。一般入居者も混在している団地がある中で、今回のモデルを普及していくことが、効果として期待されるかなど。そういった点で、これまで工夫してきたことや、今後の横展開の展望について教えてください。

## ○特定非営利活動法人いわて連携復興センター

もう自治会はいらないという団地などは、岩手にとどまらず、他県にもあります。ただ、自治組織があることで、自分たちの生活がどうなっているのかということが凄く大事だと思います。

例えば、今回の取組それぞれの活動を、メディアも含めて、どのように上手く展開していくかということが重要だと思います。今年度は、本事業以外でも、我々が関わっている災害公営住宅等については、具体的な取組事例を広く共有する場を、岩手県を越えて設けたところです。やはりこういったことが必要ですし、我々としても、もっと頑張るところだと考えています。

## ○委員

例えば伴走支援という形では、地域経営組織のようなものが求められている状況かと思えます。これまでの他事業も含めた経験の中で、団体として考える理想やあるべき姿を前提としているのか、それとも、地域の考え方に基づいて支援をしているのか、どちらなのでしょう。

## ○特定非営利活動法人いわて連携復興センター

正直なところ、当初は、支援者として必要だと考えるものをベースとして、支援がスタートしています。ただ、これは、住民に対して考えを押し付けるという意味ではなく、住民の考え方を尊重しながら、一緒に考えてきました。

災害が増えているということもあり、普段から繋がりがあることは、助け合える関係になっているという声が、住民から聞こえてくるが増えたと感じています。また、こういう意味で、繋がりがあるということ、団地の強みにしたいというような声もあります。こういった住民ニーズに対応して、どのような事例提供・伴走支援ができるのかということは、ボリュームとして増えてきていると思います。

多くの世帯が、次世代の成長も含めて、消防訓練などを継続するということが理想ですが、担い手不足という課題は残っています。これをネガティブに捉えるのではなく、例えば、役員が少ない中で大事な機能を失わないためにどうするかということや、上手く輪番制を取り入れるためにどう働きかけるかということに挑戦する時期であるのかなと感じています。

## ○委員

本来、いわて連携復興センターは個別事業を実施する団体ではないにもかかわらず、あえてチャレンジしていることの意味や、この取組をどう横展開するのかということが非常に重要で、期待したいということを審査委員会でお話ししたと思います。先ほどの報告の中では言及されていませんでしたので、お聞かせください。

## ○特定非営利活動法人いわて連携復興センター

別事業ではあるのですが、岩手県・宮城県・福島県の大規模災害公営住宅の交流会を、岩手県と宮城県それぞれの連携復興センターで共催した時に、岩手県からは、本日紹介した団地も参加していました。

この交流会のテーマとして、見守り・見回り活動を、他の団地はどのように実施しているのか、また継続していくためにはどうしたらよいかというものがありました。意見交換の中では、普段の取組が実は見守りの役割を担っており、その例として、消防訓練の取組が挙げられていました。

また、見守りというと高齢者向けというイメージがあるのですが、災害公営住宅の一般化が進んでいることで、様々な世帯の安心な生活に繋がっているということからも、訓練の取組がやはり効果的であると共有されていました。

コミュニティ支援の関係で、今年度、北上市の県営黒沢尻アパートから継続性に関する問い合わせを受けたことがあります。これに対して、沿岸や盛岡市で取組事例を個別に提供したところです。

## ○委員

高齢化や死亡・退去などによる空室に新たな入居者がどんどん入っていくことで、次第に被災者という共通の価値観が希薄になり、被災者自体も年齢的なことも含めて力が無くなっていくという状況があるかなと思っています。

その際に、隣接する地域や災害公営住宅外の住民とどう関わっていくか、それには、また何らかの介入がなければ上手くいかないのではと思います。

ただ、誰がどのように介入するのが凄く難しいと思うのですが、これまでの取組からこういった形があると考えているか、教えていただけますでしょうか。

## ○特定非営利活動法人いわて連携復興センター

時には外部からの介入が必要であり、今後もそれは変わらないと思います。ただ、いわて連携復興センターがその役割を担い続けるべきではないとも思います。そこで、陸前高田まちづくり協働センターといった市町村域の地域支援センターや社会福祉協議会などが、自治会の相談相手となれるようにエンパワーメントしていくということが、考えられるところです。

## ○委員

この事業は一過性のイベントではなく伴走支援ということでしたが、成果目標はどのようなものでしょうか。こういった伴走支援は、成果目標の設定が非常に難しいと思う

のですが、どのように考えているのでしょうか。

#### ○特定非営利活動法人いわて連携復興センター

成果目標の設定が難しいのは、そのとおりです。参加者アンケートの対象者を、通年の伴走支援を行った自治会役員や運営委員とし、設問も、団地などの全体について伺うものとする予定です。

例えば、役員は団地の住民に働きかける意識を持っているので、このようにアンケートをとることで、役員自身の心の復興と同時に、団地全体の変化についても確認したいと思っています。

心の復興事業自体は1年間のものですが、我々が関わっている団地の中には2～3年目というところもあります。そういったところは、消防訓練参加者の前年度との比較や、取組の前後比較などについて、最終的にある程度示したいと考えています。

#### ○委員

成果物について私も気になっていたもので、これは提案のようなものです。

事業が終わった後に、どのように波及させるのかという課題があると思います。このままだと目標に届かないと思うので、一般化できる事例が含まれたレポートのようなものや、伴走支援を行ったことで得られた知見をまとめたテキストのようなものを作成して、これらを成果物とするという方法があると思いますので、御検討ください。

#### ○和田被災者生活再建課長

では、以上で「特定非営利活動法人いわて連携復興センター」様からの報告は終了となります。どうもありがとうございました。

これをもって、事業者の皆様からの成果報告は終了ということになります。

この後、15時25分から再開させていただきますので、審査委員の皆様は、時間になりましたら御着席をお願いいたします。

なお、公開部分はこれで終了となりますので、恐れ入りますが、傍聴されている方は御退出をお願いいたします。